

猫蓑通信

第128号

令和7年
(2025年)
10月30日発行
(年3回発行)

『連句入門』再版に思い出すことなど 武井雅子

東明雅著『連句入門 芭蕉の俳諧に即して』は昭和五十三年（一九七八）に中公新書として出版された。発売直後から朝日、読売、日経、東京新聞などに著名な方々が書評を寄せてくださっている。また読者からは書店で見えずに買いました、電車の中吊りで見て買いました、とてもわかりやすく今まで知らなかった連句の世界を知ることができ感激です、など、さまざまな反応をいただいていた。

それから三十年、父没後の平成十六年（二〇〇六）に今は亡き島村曉已様、生田目常義様はじめ皆様のお力添えで、『連句入門』一千部が中央公論新社より再販されることになった。そしてその後、また長い間絶版の状態が続いていたが、二十年経った今般、鈴木千恵子猫蓑会会長、平林香織同副会長はじめ皆様のご尽力で猫蓑会から新装版が刊行されることになった。すでに半世紀もの月日が流れたことに愕然とするのであるが、今また新たな『連句入門』を手に行けることは感慨深い。

父が『連句入門』を執筆していたのは信州大学定年の二年前、六十三歳の頃である。父の三十五年にわたる信州大学での日々の半分は主として西鶴の研究、私の幼い頃は西鶴の研究に没頭し、家の書齋と大学の授業を往復する生活で、本棚にたくさん並んだ「西鶴」を私は「にしづる」ってなんだろうと思っていた。

昭和三十六年（一九六一）伊那の根津芦丈翁を信州大学に招き信大連句会を発足させてから、父の連句研究、実作三昧の日々が始まった。廃れるばかりの芭蕉の俳諧をなんとか後世に伝えたい、絶やしてはならないという強い気持ちに突き動かされていた。当時は信大連句会の例会のほか、芦丈門の清水瓢左、野村牛耳、鳥塚江南、三井武翁、石沢無腸、また芦丈門以外の方々とも盛んに歌仙を巻いていた。あちこちにかけ回すことも増え、来客も多くなり、深夜まで付け進んで泊まって行かれる方もあった。また頻繁に文音もしていて、今のようにはパソコンもスマホもない時代だったから付句がたちどころに返ってくるということはなかったけれど、それなりの句を味わう時間もあつたことだろうと思う。

『連句入門』は初め『現代連句入門』というようなタイトルであったが、結局『連句入門』

●目次●

▽『連句入門』再版に思い出すことなど

武井 雅子

◎第三十四回同人会作品五卷

3

▽【同人会留書】明雅先生と恐竜 根津 忠史

5

◎第百七十二回例会（猫蓑会総会）作品五卷

6

▽【速報】根津芦丈翁新出資料について

8

▽島村曉已様の思い出 佐々木有子

9

▽写真俳句の可能性を求めて

小川 裕司

10

●事務局だより

12

芭蕉の俳諧に即して』ということになった。あくまでも芭蕉にこだわり芭蕉の残したものを伝えたい一心だったのだと思う。執筆を続けていた昭和五十一年、五十二年は多忙な日々を送っていた。三月にはNHKラジオで「連句は楽し」という番組が放送され、亀戸天神社においての奉納連句に井本農一、池田彌三郎、森川昭氏らと共に連句を巻き、その様子が全国放送されている。また信州大学

が俳文学会の会場校の年であつたから、更科紀行立峠の痕跡の調査に出かけたりもしていた。家庭では娘たちの結婚が続き、孫の誕生など賑やかで多忙な日々であつたが、連句入門は少しずつ書き続け



ていた。毎日原稿用紙十ページを日課にしていたらしい。謡曲のテープをよく聴きながら書いていた。原稿書きにありがちなことであるが、すらすら書ける日もあれば、苦心惨憺、筆が進まず全部書き直しの日もあったらしい。芭蕉の俳諧をいかに伝えるか、蕉風の式目、特に付けとの転じの大切さをいかに易しく伝えるかにこだわり、心を砕き苦心をしたと聞いている。

『連句入門』のあとがきに「松本市元町の茅屋にて」とあるが、私はあの家を今でも鮮やかに思い出す。百坪の敷地に胡桃、栗、柿、葡萄、梅、桃、杏、と実のなる木が植えられ、季節の花も咲いていた。父が毎日散歩に連れて行った柴犬のケンちゃん（本名、謙信号）



もいた。家の玄関を入った左が書斎、三面は床から天井までの本棚で、眺えた大きな机と椅子があった。松本の冬は厳しい。二階の子供部屋ではストーブは使用禁止されていたから、私は父の書斎のストーブにあたりによく書斎にお邪魔をしていた。何を話したかは覚えていないが、父との会話は楽しかった。

その後昭和五十五年（一九八〇）、信州大学を定年退官し柏に移ってからは、新宿のACCで連句講座を開き、多くの優秀なお弟子さんと更に連句三昧の日々を送った。柏では「葛飾連句会」に発した「柏連句会」を毎月続けていた。

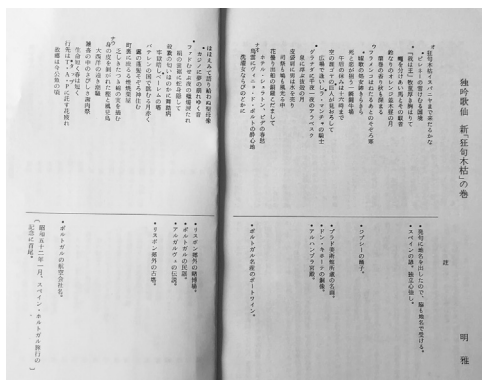
父亡き後は母が、その母も逝って四年になるが、柏連句会は途切れることなく今も月一回続いている。長い日本の詩歌の伝統に与る喜びと実作の楽しさから逃れられないからである。毎月の会報も三百九十四号に達した。

父は大正四年（一九一五）生まれ、待望の長男だったが、大正八年（一九一九）、当時台湾台中の小学校に単身赴任中の父親（私の祖父）は四十八歳の若さで病死している。父は父親の記憶は何もないと言っていた。その台湾から祖父が祖母に宛てた息子を想う達筆な手紙が残っている。若くして遠くに生まれたばかりの長男を残して祖父はさぞ無念であったことだろう。また父親がなく育った父も辛いことは多々あったことと思う。太平洋戦争で多くの若者が犠牲になった時代、もしかしたらラバウルで戦死していたかもしれないとか。「不思議に命ながらえて」はお酒が入ると父の口癖だった。八十八歳まで精力的に仕事をし、幸せに育ててもらい、西鶴、連句の書物を残してくれた父に有り難さを感じない日はない。何事もああいいうことがなかったらこういうことにはならなかったということ、人生はその連続とつくづく思うのであるが、はるか九州熊本に生まれ、信州で三十五年を過ごし、伊那の芦丈翁にめぐりあい、連句にのめり込んで行った父がいなければ、今の猫養会もないということになる。

『連句入門』やそれに続く『芭蕉の恋句』（岩波新書）を執筆していた頃、父と母は海外旅行に出かけるようになっていた。いつも計画する

のは母で父はそれについて行くのだが、初めて壮大なパルテノン神殿を眼前にした時の強烈な感激を何度も話してくれた。上海、西安、北京、洛陽の旅、トルコ、エジプトの旅、インドの旅へ私は歳をとった親の付き添いとの名目でついていったが、現地でお腹をこわし介抱されるのはいつも私だった。戦争を潜り抜けてきた世代は身体の抵抗力も私のようにやわではないと痛感したものだ。

『連句入門』を執筆中の昭和五十二年一月からはスペイン、ポルトガルの旅に出かけ、鶏の絵の描かれた壺を抱えて帰ってきた。連衆の方々と巻く連句も楽しんでたが、その折の独吟の作品も残している。



独吟歌仙 新「狂句木枯」の巻（『壺道（はりみち）』第2号、1977年6月）

この度の『連句入門』の再版が多くの人目に触れ、「俳諧の連歌」、連句文芸の裾野が広がり楽しい仲間が増えることは私の願いでもある。

第三十四回同人会作品

歌仙五卷 152

令和七年六月二十二日(日)
於 アルカディア市ヶ谷

ブラキオサウルスの座

歌仙「河骨や」

鈴木千恵子 捌

河骨や雨の波紋の中にあり

千恵子

蟪蛄生まる脇の四阿

敦子

名物の仕出弁当楽しみに

忠史

破らぬやうに包装紙解く

純子

月代にギター奏でる兄弟

英雄

改札口を抜けてやや寒

執筆

ウ 学校に猪出たと連絡網

敦

渡す相手の違ふ恋文

千

みづうみに飛びこみ見せる本気度を

純

弁天様の謎の微笑

史

伝法な姐さん賽の壺振つて

千

行灯の灯のチヂと揺れをり

雄

犬ぞりは月の平原まつしぐら

史

たつぺ踏みつつやつてくる友

敦

塩つまみ大吟醸に舌鼓

雄

蔵にいつぱい古古古古米など

純

花しきり混声合唱洩れ聞ゆ

敦

谷川俊太郎のどらかに読む

千

ナオ 投資家の思惑よそに蟹気楼

純

百円もらひ急ぐガチャポン

史

駄菓子屋のばあちゃん何をしてるかな

千

工夫それぞれ鳥対策

史

リハビリは痛いくらいが効果的

純

給水ポイント後輩が待つ

雄

囚はれの姫が火種のこの戦

純

一寸法師愛あればこそ

史

捨てないで気弱な間夫の泣き出して

純

ゆつくり下る螺旋階段

敦

平和賞またも遠のく望月夜

純

案山子のまどふブランドのシャツ

敦

ナウ 秋寂ぶの胡坐の猫をくすぐりて

雄

干物並べる老舗店先

史

あと一つジグソーパズルどいつた

敦

三角関数役に立たない

史

歌枕巡りて綴る花便り

雄

稜線はるか仰ぐ初虹

執筆

※ウ8句目 たつぺⅡ(関東地方で) 霜柱

連衆 武井敦子 根津忠史 近藤純子

鈴木英雄

ステゴサウルスの座

歌仙「ステゴサウルス」

佐々木有子 捌

雲の峰ステゴサウルス草を食む

有子

絵本作家の筆走る夏至

葵

父と子が腹出したまま寝息立て

徹心

風のそよりと吹き抜けてゆく

霞

三叉路に路面電車と月の舟

葵

誰とも会はず夜業こつこつ

弘子

ウ 夢窓忌は壁に向かひて半跏趺坐

心

酒もたばこも好きな奴なり

葵

まだ慣れぬはにかむ笑みがいとほしく

心

素早く盗む赤い唇

霞

米櫃に鼠一匹ちうと鳴き

葵

根はおどけ者森の石松

心

月冴ゆる櫓を漕げば水脈ゆらゆらと

霞

指さす先に光るオリオン

葵

襟元のバッジ新し新議員

霞

運動靴にこだはつてゐる

葵

見上げればここがふるさと花の丘

弘

仔犬じやれあふ暖かな景

霞

ナオ ノートルダム鐘の流れゆき

葵

地下迷宮で出会ふあやかし

同

ありがたく頂きませう古古古米

心

あがり症かも口が回らず

有

客が来て羽織る浴衣の裏返し

心

髪にからまる闇の蚊遣火

同

小筥には昔の恋がわんさかと

葵

時が過ぎればいともすつきり

霞

世に逆らひ本屋をやつと開きたる

弘

石部金吉けふも黙々

葵

山伏の荒行見遣る望の月

心

秋の蛭の命消えゆく

葵

ナウ 葉書の名色なき風に思ひ出し

弘

盤踏み口ずさむ唄

霞

旧友といつしよに巡る港町

心

方位磁石でわかる東

葵

花大樹バドミントンの羽根衝へ

有

春の一步は右の足から

弘

連衆 石川 葵 佐藤徹心 高塚 霞

市野沢弘子

第三十四回同人会作品
歌仙五巻 355

トリケラトプスの座

歌仙「トリケラトプス」 宇田川 肇 捌

薫風やトリケラトプス駆ける丘

メタセコイアの天を衝く夏至

読み耽る古典全集積み上げて

4 t 車にて運ぶ諸々

県境の送電線に望の月

零余子御飯を鉄釜で炊く

ウ 身に入むよ米騒動の巷では

かかあ天下が円満のコツ

昔から世話女房にあこがれて

司法試験につひに合格

コンプライアンス教育徹底し

雪夜の月を過ぎる物の怪

寒弾の撥音窓を震はせて

ファンクでクールなジャパン大好き

傘寿やら米寿白寿と祝ひ事

眼科医院はいつも繁盛

花守の朝な夕なに丹精し

子供等遊ぶ囀の中

ナオ 暮敵と遍路宿にて邂逅す

散歩の犬は飼主に似る

意味もなくまばたきをする付け睫毛

シャンパンタワーホストおススメ

愛してる詐欺と知りつつ止められず

武士の情けで依願退職

肇

香織

正夫

孝子

未悠

織

孝

織

悠

夫

織

孝

織

肇

悠

孝

織

夫

同

織

孝

肇

悠

織

蜚舞ふ遠流の島の能舞台

青葉時雨に濡るる弁天

相続の権利あちこち五十人

端溪硯洗ひ浄める

月今宵上野の森のパトロール

池の辺に鴨渡る頃

ナウ 純喫茶檯の扉も懐かしく

ペンケースには肥後守入れ

誤つて剃り落したる父の髭

社長の像が偉さうに庭

まほろばの白亜の城を包む花

釣り糸垂らすうらかな午後

夫

肇

悠

孝

織

同

夫

織

悠

孝

織

夫

同

織

孝

肇

悠

織

石ころを蹴る凍月の道

町場には穴に入らぬ熊がゐて

グリーンランドは安い買ひ物

混沌の奈落に下がる糸つかみ

歯を食ひしぼり写真家となる

天空の村楚々と咲く花の頃

離れてはまた戻り来る蝶

ナオ メーデーのデモ行進は和やかに

名物饅頭知る人ぞ知る

庭園の水琴窟に耳すます

何処にいつたかピアス片方

二人きりアバンチュールの夏休み

金魚のやうに君を泳がせ

眼鏡して生命保険勧誘員

砂かけ婆弱き助け

廃校をよみがへらせて図書館に

ウエルカムなり移民移住者

月の降る沙漠に国境線はなし

南京豆をうづたかく積む

ナウ キョンシーのコスプレ衣装ハロウィン

うがひ葉の色はオレンジ

出場は狭き門らしのど自慢

昭和の父さん子ども真似する

花の宴けふはとことん無礼講

朝寝の夢はいつか見た夢

執筆

み

端

夫

あ

洋

あ

洋

夫

端

あ

洋

あ

洋

端

あ

夫

あ

洋

端

夫

洋

同

夫

あ

洋

あ

夫

あ

夫

端

み

大島洋子

岩崎あき子

田中秀夫

松本端七

モササウルスの座
歌仙「茴香の花」

西田 荷夕 捌

茴香の花を葉に初詩集

荷夕

耳にかそけき谷戸の滴り

雅子

公園の保育園児の遊びあて

鑑

パンダ乗り物長い行列

転石

山の端に弓張月のくつきりと

雅

浅き眠りにすだく虫の音

鑑

阿波踊り阿呆阿呆となり下がり

雅

左右の足が妙にもつれる

石

あの目付きいつもからんで縋りつく

同

アンザイレンで不意の接吻

鑑

与野党に思惑がある会期末

石

戦まします激しさを増し

雅

老病の孤舟に詠める冬の月

石

毛糸の帽子やつと完成

夕

大仏殿異国の友を案内して

雅

新幹線は時間通りに

鑑

浦伝ひ花の並木の連連と

雅

夢か現か囁の中

同

ナオメーデーに対策迫る物価高

鑑

新札どうも悪い手離れ

石

別れぬと未練がましい男なり

同

匈奴におくる後宮の美女

夕

玄関に置き配されたシャーベット

鑑

令和七年六月二十二日(日)
於 アルカディア市ヶ谷

夏蘭に家族旅行へ

宝籤めでたく当る二等賞

つつい盃を重ね悪酔

昭和には植木等がをりました

パットを入れてゴルフ楽しき

立食の同窓会に月の影

瓢を磨き無聊慰む

ナウ小牡鹿がよぎり車道に急停止

株の相場の指標あれこれ

風雲児今は白髯好々爺

恩賜の時計しまふ抽出し

天上の花清らかに此岸まで

二部合唱の春の教室

執筆

夕

雅

夕

石

鑑

雅

同

鑑

夕

雅

鑑

雅

連衆 武井雅子 荒木 鑑 林 転石

【同人会留書】

明雅先生と恐竜

根津 忠史

今年は昭和百年。これは五十年前のお話です。

松本元町の明雅先生のお宅に息子と二人でお

邪魔した時のことです。当時、幼稚園児だった

息子は、男の子が誰しも通る道の恐竜にはまっ

ており、部屋に入り挨拶がすむと、すぐに先生

に得意げに解説をはじめました。

「ティラノサウルスは一番強くて恐竜を食べ

るんだよ！」

「ブラキオサウルスはうんとでかくて、歩く

と雷みたいな音がするんだよ！（脳味噌が小さい話はしなかったが）」

「トリケラトプスは……。」

「ステゴザウルスは……。」

先生は優しい笑顔で、「ほお、すごいんだね」

なんて聞いてくださっていました。

父の「お前は大学の先生に何を教えているんだ」、ということばに、皆で大笑いしたことを思い出します。

会長になって初めての同人会の座席表が、ど

なたのアイディアかはわかりませんが、その恐

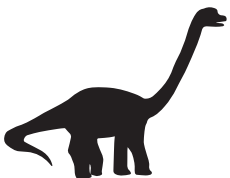
竜の名前になっていたことに、先生とご縁を

感じました。

その二十五年後、柏の猫蓑庵にお邪魔して、

「深川に来るように」と云われ、連句を始め、

以来、さらに二十五年、現在に至ります。



那智の座

歌仙「パンケーキ」 岩崎あき子 捌

白南風や海辺の町のパンケーキ あき子

快走艇のカーブする水脈 葵

飾り棚石をとりどり並べぬて 香織

新発売のおやつ猫へと 純子

太古より変らぬ亀と月あかり 裕司

木彫磨く影に露寒 転石

ウ 独り居の寡黙をうめる囲炉裏欲し 石

いろはにほへと恋を語らう 葵

手が先に動いて肩を抱きよせる 石

口説かれ方を伝授する母 織

かくれんぼ鬼がなかなか来てくれず 裕

ポップコーンはほんと弾けて 葵

月冴ゆる奏楽堂にリスト聴く 純

外套の襟立てる駅長 織

山峡の猿の温泉大人気 同

静かに御座す野路の石仏 葵

花の園三々五々に集ふらん 織

日がな煙草をくはへ麗か あ

ナオ 振り仰ぐイベント飛行かひやぐら 純

銃声響くハルビンの空 織

真実を知らない民と鎖す国 あ

嘘発見器そつと買い置く 葵

今少し涼拌麺に酢がほしい 裕

浴衣の袖よりのぞく入れ墨 葵

山の手でフェリスの女子とすれ違ひ 裕
ボディーガードに心預ける 織
姫君は問答無用の難題を 石
十字を切つて祈る祭壇 織

鎮魂の墓標に月のレクイエム 石
地下の樽にて醸す葡萄酒 葵

ナウ 散歩道遠く聞こゆる尉鷄 純
うつろひがちな少年の夢 織

アンパンマンは正義の味方赤マント 葵
新幹線で三河安城 裕

肥沃なる故郷花の爛漫と 葵
午後の授業は目借る蛙に 執筆

連衆 石川 葵 平林香織 近藤純子
小川裕司 林 転石

華嚴の座

歌仙「てつぺんに雲」 宮川 尚子 捌

夏富士やてつぺんに雲こそばゆし 尚子

鰻の旗のゆれる川土手 忠史

工場の退社時間を楽しみに 荷夕

足元注意指をさしつ 肇

真夜の月改札口に人の列 有子

胡桃がひとつポケットの中 尚

有り難し友から届く今年米 史

下の畑に犬を待たせて 夕

女王より勲章賜ふ近衛兵 肇

黒のガーター見せて誘ひぬ 有

なけなしの愛分け合つてみたけれど 尚

草津の湯でもちよつと寄つてこ 史
優等生揉まれもまれてただの人 夕
ワンカップには冬の月影 肇

遠吠はもしや一匹狼か 有

弾き語りして立てるなりはひ 尚

枯山水花片浮かべ砂の波 史

黄蝶白蝶遠慮がちなり 夕

ナオ 港屋で紙風船をみつくるひ 肇

セレブつながり摩訶不思議なる 有

とりあへず困つたときの毒掃丸 尚

妖怪供に三蔵の旅 史

関越えの木下闇にて文書かん 夕

人妻故か汗の香ばし 肇

恋すれば境なくなる狂と常 有

臍のピアスはブルーサファイア 尚

狙ひ打ち海へぼちやんとホームラン 史

五艘連なる阿蘭陀の船 肇

月皓と市民居並ぶ市庁舎に 夕

万聖節は仮面仮装で 有

ナウ 哲学を南瓜相手に語り出す 尚

記者会見に腕まくりして 史

路地裏に華僑の集ふ麻雀屋 肇

古本積んだ僕のリヤカー 夕

すれ違ふ人みなやさし花の下 尚

高く聞こえる雉の鳴き声 有

連衆 根津忠史 西田荷夕 宇田川肇

佐々木有子

霧降の座

歌仙「鬼百合や」

高山 鄭和 捌

鬼百合や下野寸前の選挙戦

鄭和

炎暑の街に笑ふボスター

孝子

脚本の最終稿に手を入れて

ひろみ

やたらはかどる部屋の片づけ

美友紀

幼児を背負ひて月の石畳

英雄

あつといふ間に消ゆる流星

み

鉄臭ふ初狸の銃磨き上げ

孝

誰が射貫くかマドンナの胸

英

あご髭にぴしりと決めた三ツ揃ひ

み

夜ともなれば裏の商売

英

大寺の月に更けゆくしづり雪

孝

兎足跡続く山径

紀

ほんたうは脱藩なんてしたくない

み

高知なまりがどうも抜けずに

紀

小流れの傍に蜻蛉翔びきたる

和

かくれんぼして逃げ回る庭

英

思春期の鬱かもしれず花の頃

み

朧の闇を救急車行く

孝

ナオ 知らぬ間にうちのミケ子が仔を産んで

紀

またも噂を流すチーママ

孝

人相に多情の性が出るといふ

紀

かくし部屋には鞭と足枷

和

砂煙敵と思へば騎兵隊

孝

近づいて来る口笛に凍て

爛酒と猪鍋で友を待つ

カネの話は言はぬ品格

綱取りの夢を叶へて里帰り

護り神住む高き山々

有明の始発電車のゆつくりと

インバウンドの写す穂芒

ナウ 露時雨肩をすぼめて古都の坂

常設展に土器のいろいろ

家系図を辿れど偉人見当たらず

中州の鳥に撒けるパン屑

養花天そぞろ歩きに連れ立ちて

移動本屋にうらかな風

連衆 坂本孝子 江津ひろみ 奥野美友紀

鈴木英雄

竜頭の座

み

歌仙「鬚涼し」

和

竜頭の座

孝

大銀杏結うて力士の涼しさよ

み

のぼりの文字を揺らす青東風

英

古書店に美術全集探しぬて

霞

財布持たない人の多かり

洋子

膝に乗る猫と見上げる月今宵

敦子

拝み太郎にちよつかいを出し

正夫

赤い羽根お願ひしますと一列に

敦

循環バスは土・日・祝祭

洋

ひよつとして女盛りは過ぎたかも

雅

教へてあげる手とり足とり

洋

味噌汁の味が漸く俺好み

独り暮らしもすでに十年

冬ざるる故郷の村今はなく

沼の辺の凍鶴の月

偶然のシャッターチャンス見逃さず

シヨットグラスでぐいとバーボン

親日の二世の植ゑた花の道

お喋り続く遠足の子ら

ナオ うらけしクルーズ船で巡る旅

眠つて食べて食べて眠つて

目だけあけ河馬はひねもす何思ふ

ムーミン谷の穏やかな日々

はるけくも昭和百年感無量

お隣の娘のおさげ可愛い

甚平が粋な上布を誑かし

俱利伽羅紋々愛の証明

日本海臨む峠に祠あり

牧水歌集リュックサックに

月の酒水頭膾などあてにして

松の手入れの済みし坪庭

ナウ 依頼編み爺の蘊蓄きりもなく

コンビニへ行きスポーツ紙買ふ

自販機の熱々の蕎麦人気あり

様子窺ふ本家本元

花の宴請はれ一差し舞ひ納む

夢見心地の春暮るる頃

連衆 大島洋子 武井雅子 武井敦子

國司正夫

雅

夫

洋

雅

敦

夫

洋

雅

敦

洋

夫

洋

雅

敦

霞

洋

雅

夫

敦

敦

夫

敦

洋

霞

雅

令和七年七月二十日（日）
於 江東区芭蕉記念館

浄蓮の座

歌仙「薄荷刈る」 田中 秀夫 捌

湧きおこる白き群雲薄荷刈る 秀夫

ななほし天道とまる葉の裏 恵子

かくれんぼ見つけられたい気もありて 千恵子

クローゼットの服をより分け 吉文

チェロの音に弓張月の現はる 未悠

冬支度する古民家の宿 夫

ウ 地芝居で振られた役は馬の脚

三歩進んで二歩下がるとか 千

待ち人は来らずといふ籤を引き 吉

ふと気がつけば佳き男あて 悠

どこからか古米古米次々と 悠

座敷童は曲屋の奥 千

月影のサンタクロース迷子らし 同

北風に乗りパンダ故国に 吉

乾杯は十年ものの紹興酒 千

嬉し恥づかし隠し芸とか 吉

花篝来る人みんな美しく 恵

春のショールの素材さまざま 千

ナオ 地元産あんこたつぷり椿餅 悠

固くて高い枕好きです 千

起きてすぐスクワットするマニアにて 悠

充電しつつ自転車旅 千

どこまでも飛んでいったよ麦稈帽 悠

野点楽しむ桜桃忌なり 恵

漱石に負けぬくらいの負け惜しみ
ストレイシープマドンナの前
団員と激しい恋のチアガール
鳩の餌やり駄目と看板

人気なき築地市場に月さやか
個展をのぞく秋の坂道

ナウ 剥き終へし渋柿百箇もう百箇
退屈さうにポスト付み

シテイバス乗せては降ろす高齢者
大きく吸って深呼吸する

笑顔なるこども食堂花の中
兄妹のシャボン玉飛ぶ

連衆 渡辺恵子 鈴木千恵子 永田吉文
柵町未悠

吉 夫 千 恵 吉 悠 恵 吉 千 吉 同 千



【速報】
根津芦丈翁新出資料について

令和七年五月二十二日、猫養会のホームページから「お問い合わせ」があった。「祖父の遺品を整理していたところ、根津芦丈……と書かれた封筒、中には筆で半紙に書かれた物が数枚。私には読めず町、隣の市でも見てもありませんが、よくわからずこちらへたどり着きました。」

その後のやり取りで、根津芦丈の書簡と発句であることがわかり、無事に、芋庵根津忠史さんのところに届けられた。これまで知られていなかった芦丈の発句も含まれている。詳しい経緯は『猫養通信』次号に掲載予定。



HP 管理人のもとに
送られてきた写真より

島村曉巳さまの思い出 佐々木有子

猫蓑会の重鎮、島村曉巳様が令和七年四月十一日に亡くなりになりました。曉巳様とは平成五年以来の長いお付き合いで本当にお世話になったのですが、ここに曉巳様との思い出の一端を綴りたいと思います。

元々、曉巳様の奥様と私の母が俳句結社「寒雷」でのお友達であつたことからお付き合いが始まりました。「寒雷」の古参同人としてもご活躍なさつていた羅浮亭秋元正江宗匠が連句の発展を目指して平成五年に神楽坂連句会を立ち上げられ、その際に会員を集めてほしいと言われていた母が奥様をお誘いしたのです。すると奥様は「私より主人の方が連句に向いていると思います」とおっしゃり、曉巳さんに連句を勧められたとか。この間の経過は猫蓑通信第百二十一号で曉巳様がインタビューに答えるかたちで述べていらつしやいます。曉巳様は丁度連句にご興味をお持ちだったようで、二つ返事で会に参加なさることになりました。

平成五年九月十八日（土）母の記録によると「クーラーが故障していると思うほど暑い日」に第一回神楽坂連句会が開かれました。講師は秋元正江先生、出席は先生以外に十五名（男性六名、女性九名）でした。俳句のベテランの方も数名居たようですが、俳句も連句も初めての方が多く、「文学の薫り高い連句を新人に教えた」という秋元先生のご希望に叶うものだった

たと思われまふ。幸いなことに他の連句結社を率いていらした浅野黍穂先生が御参加でしたので、秋元先生と浅野先生お二人のお揃いで二卓にわかれての連句となりました。曉巳様は黍穂先生の卓に入られ、黍穂先生の発句「坂を出て秋の祭りにあひにけり」、続いて母の「スーパール水に浮く月」で半歌仙「秋の祭」の巻が始まつたのです。曉巳様は裏の折立に「吾子に読む童話北欧の薄き陽よ」と詠んでいらつしやいますが、これが曉巳様の連句の初めの一歩だったと思われまふ。

その後横浜にお住まいになりながら熱心に神楽坂まで通われて、平成七年五月の曉巳様の半歌仙「少年の眉」が第十七回全国連句新庄大会の優秀作品に選ばれた折に、神楽坂で禁制のビールで乾杯したとの記録があります。

A C Cにも猫蓑会にも入られ、生涯明雅先生を尊敬していらつしやいました。曉巳さんが、「私には人生の恩師と呼べる人が二人居ます。一人は明雅先生で、もう一人は鍼灸の先生です」と仰つていたのが記憶に残っています。このように連句にのめり込んでいらした曉巳さんはいつも『連句入門』を持ち歩かれていました。武井敦子さんによると、座の誰かが質問すると、「それは連句入門の何ページの何行目にかいてあるよ」と教えていらしたとか。さすが、皆に歩く式目と呼ばれていた曉巳さんです。

曉巳さんはまた多趣味でいらして、特に歌舞伎と落語に通じていらつしやいました。神楽坂の忘年会で歌舞伎の有名な台詞回しをそのまま再

現してくださつたことも一度や二度ではありません。曉巳さんに「なぜそんなに歌舞伎にお詳しいのですか」と聞いたら、「学生の頃から歌舞伎が大好きで、試験等で学校が早く終わったときは、三階席から歌舞伎を楽しんだものだ」とのお返事でしたので、筋金入りだったのですね。曉巳さんは落語にもお詳しくて、その為か座をご一緒すると冗談が次々に出てきて、大笑いになったことも度々でした。二月の新年会の折には、四谷三丁目までたくさんのお寿司を受け取りにいつて下さつたご親切も忘れられません。

曉巳様はまた、新宿で「発句の会」をなさり、連句の仲間達の発句が向上するように心を砕いていらつしやいました。さらに、「横浜アヴァンの会」を主宰なさつていて、横浜での連句の興隆にもお力を添えられていました。毎年、夏の横浜の花火大会の頃には大勢の連句人を集めて、連句＋花火＋中華料理を楽しんだのも忘れられません。

この前抽出の整理をしていましたら、忘年会の折に曉巳さんが皆で歌うように配つた歌詞が出てきました。「鬼のパンツ」です。皆で童心に戻つて歌つたこと思い出しました。

曉巳様、長い間の楽しい時間をありがとうございました。



2018年9月15日、神楽坂25周年で司会をする曉巳さん



1996年11月16日、花吹雪にて。左端が曉巳さん

写真俳句の可能性を求めて 小川裕司

私は日本の海運会社に勤め、十五年近くを海外で過ごしました。具体的には、シンガポール、シドニー、そしてソウルです。引退後の人生を考え始めた五十歳頃、シドニーでカメラを手にし、ソウルで俳句と出会いました。この二つの趣味が融合し、写真に俳句を添える「写真俳句」という表現活動が私のライフワークとなり、この数年、各地で作品の展示会を開催しています。この活動を通じて多くの人々と出会う中で、私は「写真俳句」が単なる俳句の付属物ではなく、俳句とは異なる可能性を秘めた新しい文芸なのではないかと考えるようになりました。今回は、連句という言葉の芸術を愛する皆様に、私の写真俳句の活動と、そこから見出した表現の面白さについてお話ししたいと思います。

俳句との出会い

私の俳句との出会いは二〇〇六年、ソウルでの駐在員生活時代に遡ります。ご縁があつて「ソウル俳句会」に参加したのが始まりでした。ソウル俳句会は、在住の日本人や韓国人、そして駐在員が自由に句作を楽しむ和やかな雰囲気、特に丁寧な添削指導で知られていました。海外の俳句会は現地の日本人会に付随することが多いのですが、ソウルでは毎年、日本から著名な俳人をお招きして合同句会を開催するとい

う特徴がありました。過去には金子兜太氏、坪内稔典氏、黒田杏子氏、復本一郎氏、長谷川耀氏といった方々が訪れ、私自身も滞在中に黒田杏子先生、復本一郎先生、坪内稔典先生から直接ご指導をいただくという貴重な機会に恵まれました。現在は私は現代俳句協会の会員として、その学びを活かし句作を続けています。

写真俳句という新たな地平へ

俳句を始める以前から、私は趣味として写真を撮り続けていました。ある日、たまたま撮影した写真に句を添えてみたところ、しつくりと馴染むのを感じ、これが「写真俳句」を始めるきっかけとなりました。写真俳句には歴史があります。かつて「フォトスタ」という形で小さなブームがあり、森村誠一氏などが提唱しました。特に、俳人の伊丹三樹彦氏はご自身を「写俳亭」と名乗り、写真と俳句の普及に尽力されました。二〇一九年に九九歳で逝去されましたが、生前、私は伊丹氏を訪ねて三時間ほど直接お話を伺う機会を得ました。

俳句の世界に

は、純粹に言葉の力だけで勝負すべきだという考え方があります。その考え方も理解できますが、私自身は写



伊丹三樹彦氏と筆者（右）

真俳句を追求する中で、写真が持つ視覚的な情報、俳句単体では伝えきれない奥行きやニュアンスを生み出す面白さを何度も実感してきました。二つの異なる芸術形式が響き合うことで、新しい表現ジャンルが生まれるのではないかと。スマートフォンが普及し、誰もが手軽に写真を撮れる現代だからこそ、写真俳句は新たな価値を見出し、多くの人々の心を動かすことができると感じています。

「つきすぎ」を避ける

写真俳句の制作において、私が最も大切にしているのは、俳句と写真の間の「絶妙な距離感」です。写真が句の内容をそのまま説明してしまふ、いわゆる「つきすぎ」は避けたい。むしろ、二つが互いに作用し合い、読む人の想像力の中で新しい意味や感情を喚起する関係性を理想としています。そのために、私はしばしばブレた写真や抽象的な写真を意図的に用います。たとえば、光の反射、影の揺らめき、ぼやけた風景など、特定のモチーフを判別しにくい写真です。読み手は、この写真から具体的な意味を読み取ろうとするのではなく、写真が持つ抽象的な雰囲気や感情を、俳句が提示する世界と重ね合わせます。この行為によって、俳句単体で読むよりも、より深く、複雑な感情の層が生まれるのです。写真俳句は、言葉と視覚、そして鑑賞者の想像力が織りなす、多重奏の芸術であると言えるでしょう。

展示会の開催

昨年は東京、松山、博多などで巡回展を開催しました。特に東京では上野の東京都美術館、松山では正岡子規記念館での開催が印象に残りました。さらに最近では俳句を英訳して海外で展示する活動も始めました。今年はクロアチアの日本大使館のサポートを受けてザグレブで写真俳句展を開くことができました。講演もでき、言葉の壁を越えて海外の方々に写真俳句の魅力を伝えられたことは、大きな喜びでした。この海外展示の延長線上で近い将来韓国でも韓国語俳句の展示を計画しております。

広がる可能性、連句との出会い

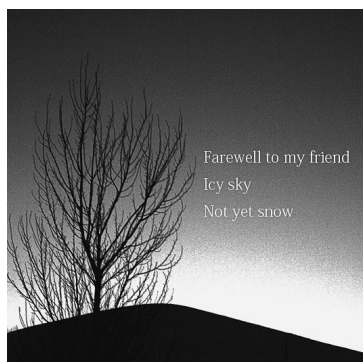
写真俳句をスライドショーにして音楽を加え、YouTubeで公開する試みも続けています。お時間があれば、ページの下の二次元コードから見ていただくと嬉しいです。

同じ俳句でも、写真や音楽が加わることで、作者の世界観をうまく伝えられる気がします。まだ実験段階ですが、俳句という文学を、現代のメディアや表現方法と結びつけることでその魅力を引き出せないかという思いからです。そして、今年から新たに連句の世界に足を踏み入れました。連句の複雑なルールに戸惑うことも多いですが、一句一句が意味を持って次の句と連なり、まるで映画のカット割りのように一つの絵巻物を紡いでいく様は、非常に興味深い

ものです。これまでやってきた俳句のスライドショーとも連句はよく似ていると感じます。どの写真を次に置くかで作品の意味が変わります。これからも、伝統と革新の両者を意識しながら新たな表現の可能性を追求していきたいと考えています。

作品を四句（一つは英語俳句）で紹介します

昨年の国内の五ヶ所の展示会と今年のザグレ



写真俳句展 b



風の盆

ブでは季節ごとに七句、合計二十八句を展示しました。その中から三句をご紹介します。来年から写真俳句の同好会を立ち上げる予定です。ご興味のある方は是非ご連絡ください

事務局だより

●既往の行事

- 六月二十二日(日)、アルカディア市ヶ谷にて、第三十四回同人会総会を開催。歌仙興行。当日作品は3〜5ページに掲載。
- 七月二十日(日)、江東区芭蕉記念館にて、第百七十二回例会(猫蓑会総会)を開催。歌仙興行。当日作品は6〜8ページに掲載。

●今後の行事予定

- 十月十九日(日)、江東区芭蕉記念館にて第百七十三回例会(芭蕉忌・明雅忌)を開催。正式俳諧興行の後、源心興行。
- 令和八年一月二十五日(日)、江東区芭蕉記念館にて、第百七十四回例会(初懷紙)を開催予定。歌仙興行。
- 同四月下旬、亀戸天神社にて、第百七十五回例会(藤まつり例会)を開催予定。神楽殿にて正式俳諧興行(一般公開)後、二十韻興行。

●猫蓑会リモート連句会

- 第二十八回を、八月十一日(山の日)に開催。
- 第二十九回を、十月十三日(月・スポーツの日)に開催。
- 第三十回は、十二月十三日(土)に開催予定。

●猫蓑基金へのご協力ありがとうございます。

- 匿名 令和七年十月 三十万円

*基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●新入会員

- 中村凡草 東京都 令和七年八月入会
- 米田水空 千葉県 令和七年八月入会
- 武内道子 神奈川県 令和七年九月入会
- 藤澤拓也 東京都 令和七年十月入会

●『新装版連句入門』新発売のお知らせ

●巻頭記事にもありますように、十月二十日(東明雅先生の御命日)に、『新装版連句入門 芭蕉の俳諧に即して』が世音社より刊行されました。一九七八年に中央公論社から中公新書として刊行され、連句入門の基本書として、芭蕉芸術の入門書、「狂句こがらしの」(『冬の日』)の本格注釈としても定評がありました。その後も版を重ねましたが、二〇〇六年の第九版を最後に品切れとなっていました。多くの連句人の方から再び世に出してほしいとの声が寄せられておりました。新たに判型を大きくし、明雅



先生の略歴を付して新装版としました。すでに先行発売にご協力いただきました猫蓑会内外の皆さまに、心より御礼申し上げます。

●引き続き、会員特別割引価格にて販売します。税込み価格一六五〇円のところ、一二〇〇円

でお分けします。購入希望者は平林香織までメールにてお申込みの上、左記のゆうちょ銀行に、一冊につき一二〇〇円(本体割引価格+送料)をお振込みください。

【申込み先】 平林 香織 khir884@gmail.com

【振込み先】 ゆうちょ銀行

口座番号 00140-4791856

加入者名 猫蓑会

●百二十七号の訂正とお詫び

左記のとおり2カ所の訂正があります。関係諸氏にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

- 5ページ掲載の二十韻「立机免状」の挙句 誤「亀鳴くらん叢の石」

正「亀の鳴くらん叢の石」

- 6ページ掲載の二十韻「新宗匠」の裏2句目 誤「カーブルカーの風のさやかに」

正「ケーブルカーの風のさやかに」

定期刊行 『猫蓑通信』第百二十八号

令和七年十月三十日発行

発行人 猫蓑会 鈴木千恵子

事務局 佐々木有子

〒161-0033

東京都新宿区下落合4-9-34・313

編集人 平林香織

編集委員

岩崎あき子・奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・武井雅子・田中秀夫

(五十音順)

印刷所

関東図書株式会社